教育等に関するアンケート（教育長・公立学校長）分析報告

（平成 29 年度アンケート実施・平成 30 年度分析）

１.アンケートの概要 ・・・・・・ 1

（１）目的
（２）対象者
（３）実施時期
（４）アンケート内容
（５）分析機関

２.アンケートの結果 ・・・・・・ 2

（１）鳴門教育大学の学部を卒業した教員の全体的な印象
（２）鳴門教育大学の大学院を修了した教員の全体的な印象
（３）今後の教員の在り方を見据え，鳴門教育大学で伸ばして欲しい能力
（４）鳴門教育大学卒業生及び修了生の教員離職の把握状況
（５）鳴門教育大学の教育内容について，良いと思われること，改善すべき点又は要望
（６）アンケートの総括

１.アンケートの概要

（１）目的

本学の教育の状況について，デマンド・サイドの意見を把握することにより，教育の質の維持・向上及び教育研究体制の一層の充実を図ることを目的とする。

特に，本アンケート結果は，在学生にとって，卒業・修了後に教職に就く（現職教員である大学院生にとっては，復職する）際に，学校現場からどのようなことを求められているかを知ることができ，修学への強い動機付けとなることを期待する。

（２）対象者

徳島県内の教育委員会教育長，徳島県内公立幼・小・中・高・特別支援学校長：対象者 435 人，回答者 321 人（回収率 73.7%）

（３）実施時期

平成 29 年 10 月に，各教育長・学校長あてにアンケート調査を依頼した。回答方法は WEB 又は紙媒体とした。

（４）アンケート内容

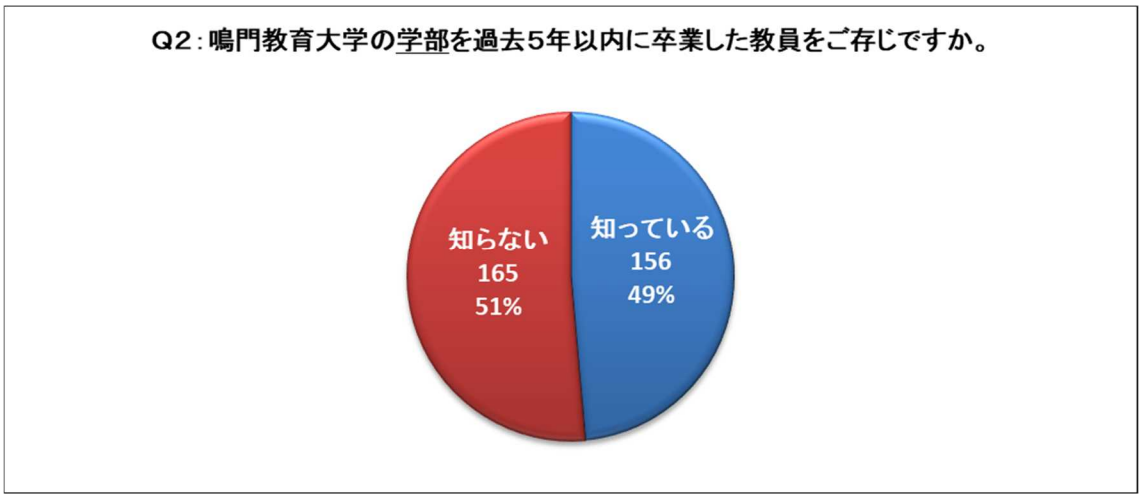
①本学の学部を卒業した教員の全体的な印象について，４件法で回答を求めた。
②本学の大学院を修了した教員の全体的な印象について，４件法で回答を求めた。
③本学で伸ばして欲しい能力について，責任感，コミュニケーション能力，専門領域における知識，教育課題を発見する力など 24 項目を設定し，３件法で回答を求めた。
④本学の卒業生及び修了生の教員離職の把握状況について，２件法で回答を求めた。
⑤本学の教育について，自由記述で回答を求めた。

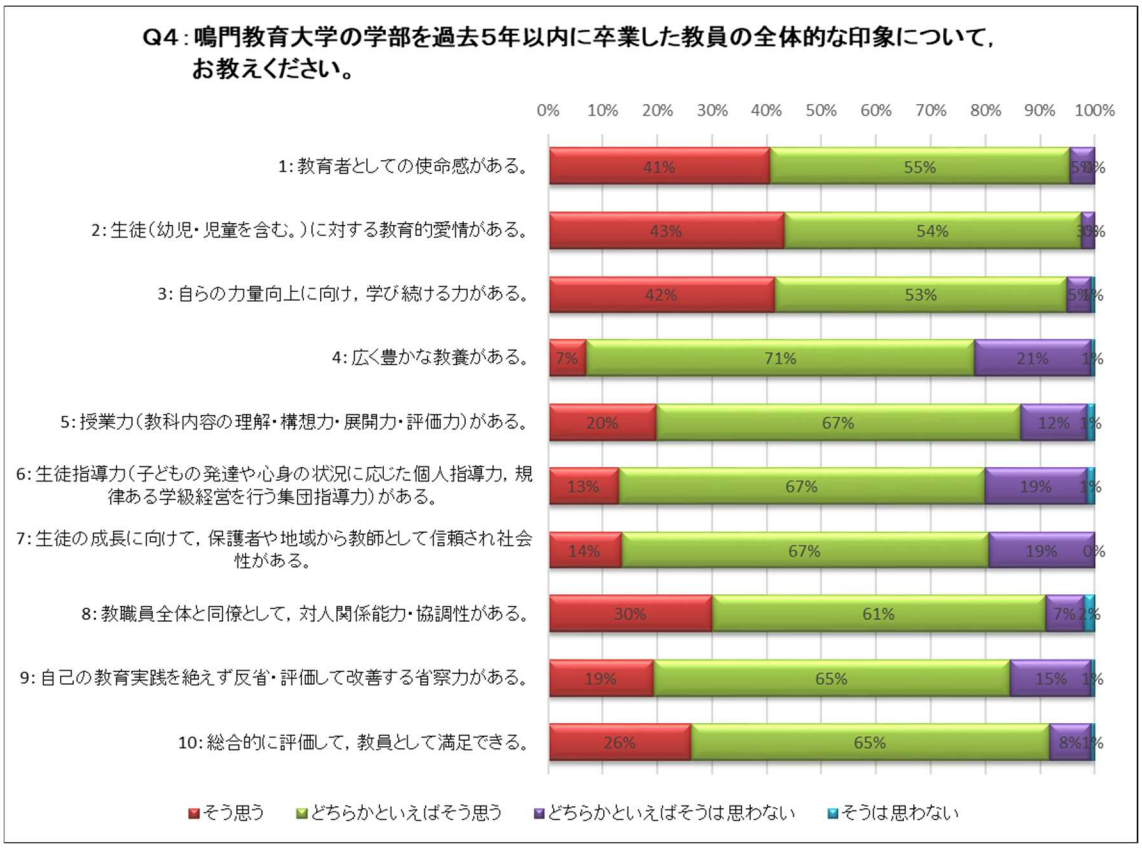
（５）分析機関

学部・大学院ファカルティ・ディベロップメント委員会

２.アンケートの結果

（１）鳴門教育大学の学部を卒業した教員の全体的な印象

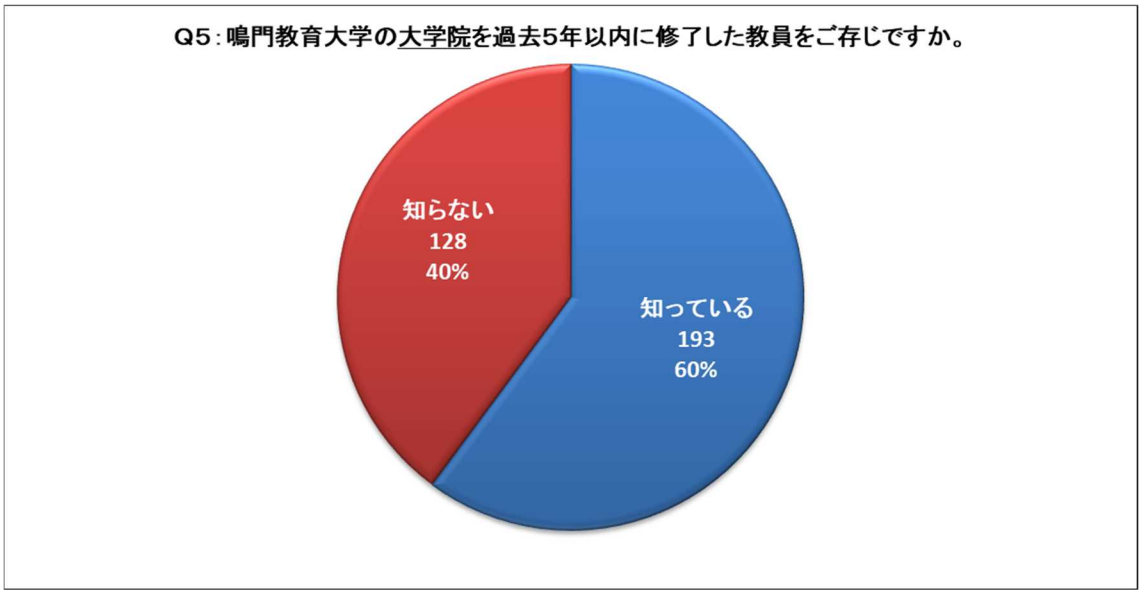




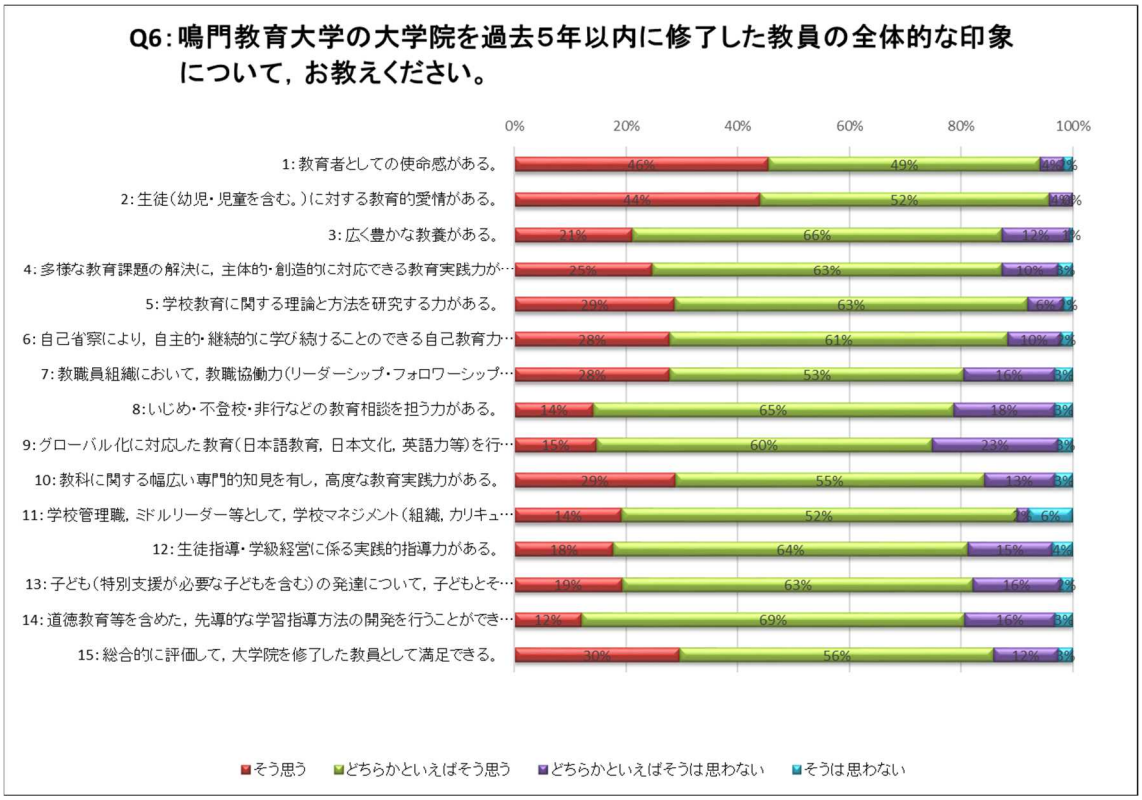
全 10 項目の質問に対して，「そう思う」，「どちらかといえばそう思う」の２つを，肯定的な回答とする。全般的な質問である「10．総合評価」では肯定的な回答が 92%と高い結果を示した。「10．総合評価」を除いて，肯定的な回答の全９項目での平均値は 88%であり，ほとんどの教育長が本学学部卒業生に対して好ましい印象を抱いている。特に「１．教育

者としての使命感」,「２．生徒に対する教育的愛情」,「３．学び続ける力」に関しては,それぞれ 96, 97, 95%と高く，本学学部卒業生が，子供に対する愛情と教育に対する使命感を持っており，本学の教育理念・目標が達成できていることを示唆する結果であった。一方，上記 88%を肯定的回答の平均水準とすると「４．広く豊かな教養」「６．生徒指導力」「７．生徒の成長に向けた保護者や地域からの教師としての信頼性・社会性」がそれぞれ 78, 80, 81%と下位を占めた。

（２）鳴門教育大学の大学院を修了した教員の全体的な印象

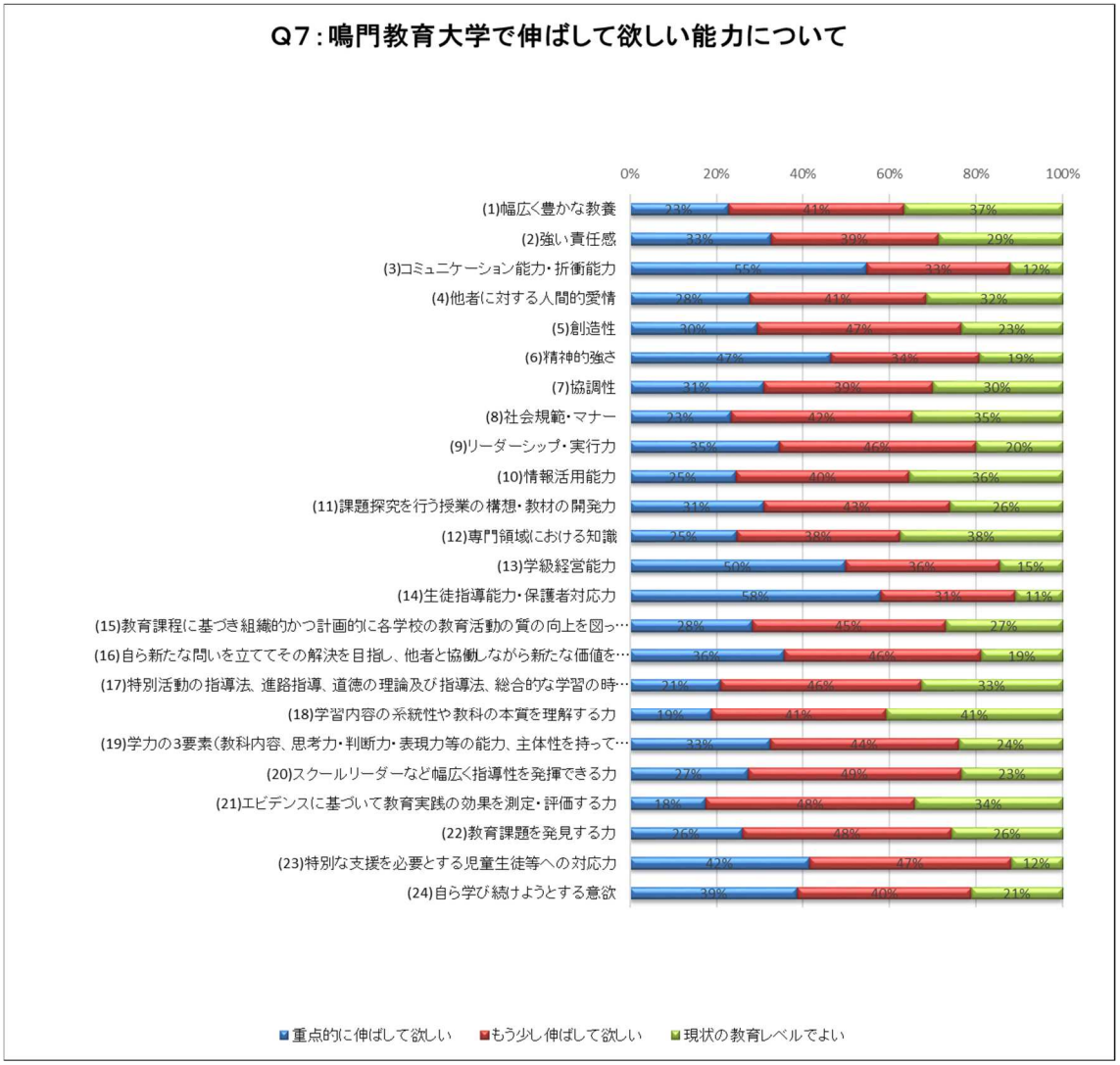


過去５年以内の本学大学院修了教員の認知度は，前年度の 48%から 60%へ増加し，修了生等による広報が促進されたのかもしれない。この認知度を上げるために，本学から徳島県の教育界に対するなんらかの働きかけをすべきである。



「総合的に評価して，大学院を修了した教員として満足できる」は肯定的回答が 86%に達し，高い評価を得ている。特に，「教員としての使命感や自覚がある」と「児童・生徒に対する教育的愛情がある」は肯定的回答が 95%を凌駕し，本学の修了生が真摯に教職に取り組んでいる姿がうかがえる。それに対して，「グローバル化に対応した教育を行うことができる」と「いじめ，不登校，非行の教育相談を担う力がある」は否定的な回答が 20%を越えている。また，教職協働，生徒指導，学級経営，子供の家庭との連携，道徳教育の指導に対する否定的回答が 18・19%である。したがって，新たな教科の指導と教科外指導に今後の改善の余地を残している。さらに，本学修了生はそれぞれの勤務校でリーダー的役割を期待されているが，必ずしも教育長や校長の期待に答えられていないことも改善しなければならない。

（３）今後の教員の在り方を見据え，鳴門教育大学で伸ばして欲しい能力



一般的資質と教育資質に分けて分析を試みる。

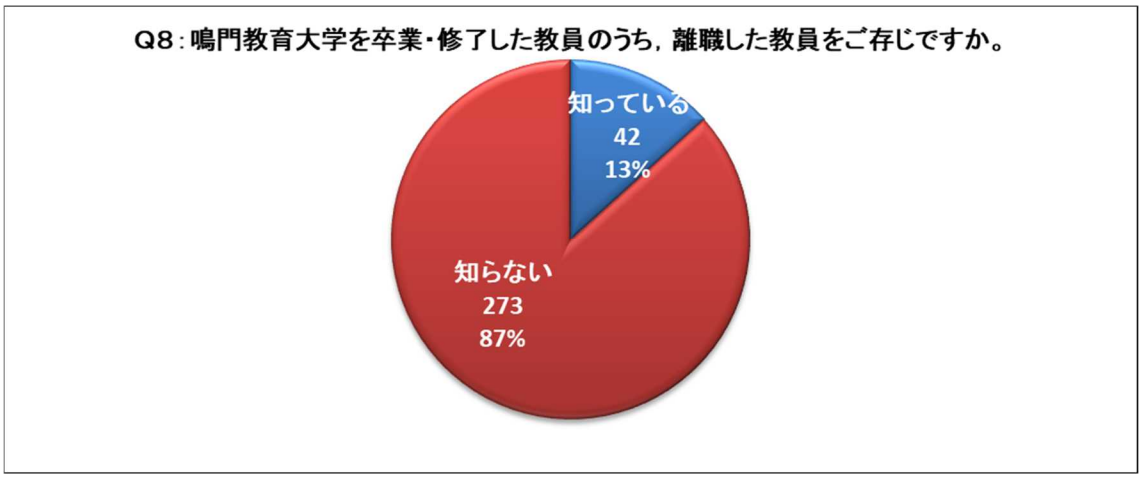
まず，一般的資質に関しては，10 項目の全てにおいて「重点的に伸ばして欲しい」と「もう少し伸ばして欲しい」を合わせた割合が 70%を超えた昨年度の結果と比べると，「幅広く豊かな教養」，「他者に対する人間的関係」，「社会規範・マナー」，「情報活用能力」について 70%を下回り，一定の改善がみられる。とりわけ，「幅広く豊かな教養」については，前年 71%から 64%となっており，「現状の教育レベルでよい」との回答も 37%と 10 項目中最高を示している。教員の努力がある程度効いたのだと考えられる。これに対し，「コミュニケーション能力・折衝の能力」は昨年の 92%から若干減少したものの相変わらず 88%と高い数値を示しており，「精神的強さ」81%，「リーダーシップ・実行力」81%の各項目が 80%を超えている。「コミュニケーション能力・折衝の能力」については，「重点的に伸ばして欲しい」への回答が一般的資質では唯一 55%と半数を超えており，本学として何らかの対策をさらに採る必要がある。

次に教育的資質に関しては，昨年度までの調査項目５項目が，「授業方法能力」，「教材研

究開発能力」で詳細なものとなり，併せて，授業をめぐるその他の能力（スクールリーダーや測定・評価等）も加えられて 14 項目となっている。「重点的に伸ばして欲しい」と「もう少し伸ばして欲しい」を合わせた割合が 80%を超えた項目は，昨年度までの調査項目の「学級経営能力」(86%)，「生徒指導能力・保護者対応能力」(89%)（但し，昨年度までは「生徒指導能力」）に加え，「特別な支援を必要とする児童生徒等への対応力」(89%)，「自ら新たな問いを立ててその解決を目指し，他者と協働しながら新たな価値を生み出していくための力」(82%）となっている。とりわけ，「学級経営能力」と「生徒指導能力・保護者対応能力」については，「重点的に伸ばして欲しい」との回答が 50%を超えている（前者が 50%，後者が 58%)。但し，この回答については，分析者が以前から指摘しているとおり，教師教育の養成段階（Pre-Service Teacher Training）で，「完全な教師」を送り出すという考えが前提にあるのではないか，則ち，こうした項目は修了生・卒業生が教師として就職した後，教師教育の研修段階（In-Service Teacher Training）の段階の教師として置かれる様々な文脈の中で実践を積み重ねていくうえで身についていく，そして，教師としてさらに成長していくということではないかということである。本学は，「即戦力」としての教員養成を謳っており，自由記述の「良い点」でも多くのお褒めの言葉をいただいているが，この「即戦力」の意味を外部に出していくことの意味をさらに吟味し，問い直す必要があるのかもしれない。つまり，「鳴門教育大学の卒業生・修了生は『即戦力』なのに・・・」という対応を引き出してしまっていることも考慮すべきだということである。教育資質に関する項目 14 項目全てで「重点的に伸ばして欲しい」と「もう少し伸ばして欲しい」を合わせた割合が 60%を超えているが，このことについても，上記の指摘がある程度は妥当しているのではないかと考える。併せて指摘するならば，教師は，現実には，悩みながら，ある時は立ち止まって成長していくのであり，単純に直線的に成長していくという前提で分析することにも問題があるように考える。ご指摘いただいた点は，我々の卒業生・修了生が教師となった時からいつ，どのようにしてこうした問題を指摘されるに至ったのか，別の手法での調査（ライフヒストリー調査，インタビュー調査等）が必要ではないかと考える。

もう１点指摘するならば，「生徒指導能力・保護者対応能力」，「特別な支援を必要とする児童生徒等への対応力」，「自ら新たな問いを立ててその解決を目指し，他者と協働しながら新たな価値を生み出していくための力」という前述した改善すべきとされた項目についてである。これについては，一般的資質の項で指摘した「コミュニケーション能力・折衝の能力」，「精神的強さ」，「リーダーシップ・実行力」との関連が窺われるものである。

（４）鳴門教育大学卒業生及び修了生の教員離職の把握状況



本年度から導入された質問であるが，分析者は，なぜこの質問を本学で実施する必要があったのか，詳細は理解していない。本学では，上記のデータのとおり，「知っている」とのご回答は 42 件，13%であった。但し，このデータは，実質的に本学の卒業・修了した者が何人離職したのか，何の理由によって離職したのかが定かではなく，加えて，前者については，同じ者を対象にして回答している可能性，後者については，定年（勧奨を含む）退職，死亡による離職などのやむを得ない離職を含んでいることが考えられ，いかなる分析を為そうとしたのか，課題設定が不明である。以上のデータ収集の不備を前提にしてあえて分析すれば次のとおりである。

おそらくこの質問を設定したのは，近年問題になっている教員の精神疾患や「職務上の問題のため」の離職の増加，2000 年代から目立ち始めた新任教員の自殺を問題にし，本学ででき得るそのための対策を模索するということであったのであろう。

しかし，文科省が 2018 年３月に発表した『平成 28 年度学校教員統計調査（確定値）』によれば，「全ての学校種において前回調査時より減少している」（生涯学習政策局政策課調査統計企画室）。しかも離職理由は，若干背景が異なる幼稚園を除けば，「精神疾患」「職務上の問題のため」以外の理由（「定年（勧奨を含む）のため」「家庭の事情のため」「転職のため」等）が 97.3%となっている。公立小学校・中学校においてが「チーム学校」政策の推進や部活動問題を中心とする教員の過重労働の問題の焦点化等，教員をめぐる状況が改善されてきていることが効いていると思われる。と言っても，平成 27 年度間に全国で「精神疾患」「職務上の問題のため」離職した者は，公・私立幼稚園，小学校，中学校の平成 27 年度間の離職者は 1,049 人おり，平成 24 年度間の離職者 1,092 人から確かに減少しているものの無視していい問題ではない。

本学でこの問題に対応するとすればいかがすればいいのであろうか。このデータそのものからは前述のとおり分析は不可能であるので，自由記述から探ってみたい。

（５）鳴門教育大学の教育内容について，良いと思われること，改善すべき点又は要望

本学を卒業・修了した教員についての要改善点・要望をみてみると,「人間関係の結び方，トラブルの対応力などに，課題を感じたことがあった」（小），「優秀だが精神的に弱い人も中にはいる。強いストレスにさらされる職場であるため，コミュニケーション能力とともに伸ばしていただきたい」（小），「強い精神力が必要であることや上手なストレスの解消法，協働の大切さなどをご指導ください。また，優秀な方ばかりだと思いますが，現場で必要なものは素直さや謙虚さ，周囲に助けてもらえる受援力であることもお伝えいただきたい」（中），「自分と考え方や生活習慣の違う人を受け入れともに前進しようとする度量の大きさを身につけてほしい」（高），「精神的に強い人，責任感のある人を育ててほしい」（幼），「組織（チーム）で対応していくものが，学校である。だからこそ先輩教師の話を聞き，リスペクトしていく素直な構えがもっと欲しい」（小），「多少の困難があっても，粘り強く対応していく精神力と忍耐力を培っていただきたい」（小），「最近，実際に教員として採用されたが，その組織の中で上手く自分を発揮できず，辞めてしまう方を見ている。研究も大切だが，社会性もしっかり身につけられるよう実習の場を多くもって経験することも必要ではないかと感じる。また，何か悩みがあった時に相談できる相手（仲間）を見つけてほしいと思う。（学生同士の交流）」（幼），「能力がありながら，性格的なものや意欲の点から，学級担任をすると困惑の度を増したり，精神的に落ち込んでしまう人がいる。児童・生徒と共に遊んだり，活動したりする能力や保護への対応力などの育成にも努めて欲しい」（教委），「精神的にタフな教員を養成してほしい」（小），「実際に現場で活動を始めると，１年位でアッサリとやめてしまう新採用が以外と多いという話を聞くことがある。受審テクニックも必要とは思うが，教師をなぜめざすのかという土台をしっかり鍛えてほしい」（中），「特に我慢する力や忍耐力，課題解決能力，柔軟に物事に対応できる力等が重要」（小），「人間の強さや行動力」（小），「大学と教育現場とのギャップに戸惑いカルチャーショックで，精神的に不安定になる教員がしばしばみられる」（教委），「子どもや保護者・同僚と協力できる力やコミュニケーション力は，非常に重要」（小），「タフな精神力などメンタル面での指導強化」（小），「精神的な強さと適応力を身につけてほしい」（幼）等であった。精神的タフさ，同僚との協働についての能力などが多くみられる。こうしたご指摘の前には，本学の卒業・修了生のまじめさ，授業力の高さを言っていただいているケースが多く，そのまじめさが授業・教室外の現実と遭って問題を生じ，かつその問題を先輩教師などの同僚と解決を図っていくことに苦手な感覚を持っているといったことであろうか。このことは，前項Ｑ７で指摘した「生徒指導能力・保護者対応能力」，「特別な支援を必要とする児童生徒等への対応力」，「自ら新たな問いを立ててその解決を目指し，他者と協働しながら新たな価値を生み出していくための力」についての課題に通じるものであろう。

では，どうしたらいいであろうか。上記の要改善点・要望では，同じく，教育長・公立学校長の多くの方が，保護者対応や教員の多忙化を中心とした近年の教育現場の厳しさを指摘しておられる。本学で対応すべきことには限界があることは明らかであるが，敢えて対策を考えるのであれば，大学の授業以外での経験，とりわけ，「教育界」以外の人々との交流の機会をできる限り増やすことではないか。自由記述欄でも「大学の授業だけでなく，

大学生活の中で多様な経験をすること」（小），「多様な人と出会い，生き方の経験させてほしい」（小）との記述がみられる。但し，このためには，本学の学生の忙しすぎる状況を改善していく必要がある。

（６）アンケートの総括

各質問への回答を集計し分析した結果，これまでの教育活動および広報活動に関して，上述した個々の成果と課題が確認された。全体として，本学の学部・大学院を卒業・修了した教員に対する教育長や公立学校長による総合的な評価は高く，本学出身であることへの認知度も高い。このことから，本学の教員養成は，全国各地の学校園で求められる標準的な資質・能力を備えた教員を養成する点において，一定の成果を達成していると評価できる。

一方，本学出身教員の印象や今後本学で伸ばしてほしい能力に関する回答，本学の教育内容における改善すべき点や要望に関する自由記述の回答等で見られたように，一部の資質・能力に関して課題があることが確認された。具体的には，グローバル化への対応，いじめ，不登校，非行に関する教育相談，教職協働，生徒指導，学級経営，家庭との連携，道徳教育の指導，コミュニケーション能力・折衝の能力など，変化する教育現場で適切に対応できる能力等に課題があると言える。

上記の能力は，教育現場での経験や現職研修を通して向上していくと期待されるが，本学の教員養成課程においては，一人でも多くの学生が，教師として最低限求められる即戦力を，卒業・修了時までに確実に習得し，卒業・修了以降も自ら学び続ける姿勢を保つことができるような措置が必要である。学部・大学院ともに，学生の修学期間を通しての学修内容は多様化して過密化傾向にあり，教職員の多忙化も無視できない問題となっている。このため，単純に授業科目の種類や時数を増やして対応することは現実的に困難である。したがって，今回の調査で確認された具体的な課題を，本学教職員および在学生の双方が共有して把握すること，それらの課題を在学中に可能な限り克服，補完できるように，カリキュラムや各授業の内容・方法などをより効率的なものに改善していくことが重要である。